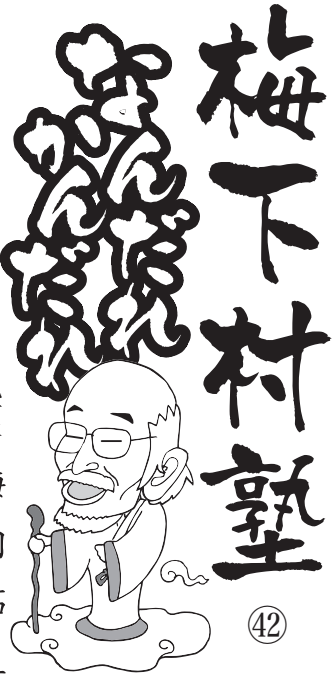
「森と水と命の惑星」国際会議に向けて②

梅下村塾 ㊷



塾長　梅内拓生

～科学と心と魂のつながり～

一期一会と永遠

〝紅葉が見守ってくれた短い日雨に濡れても永遠のものかな〟

〝感動や光と雨にならんとし心に虹を鮮やかに架け〟

〝体育館歌声響く一中祭〟

〝歌声の届く秋空鮮やかに〟

〝声と声秋の雨の日混ざり合う〟

健康は人間としての個人、社会、そして自然環境に共通するものであるという考えがWHOで提案されている。

レプラ根絶というWHOが推進している公衆衛生領域でリーダーとして活動しているバルア氏と、広く世界で禁煙教育活動を推進してきたマーシャル氏は、健康を通して自然環境と生命環境と文化環境とのつながりの中で「一期一会と永遠」について述べ、東日本大震災とその復興からのメッセージにこそ21世紀の文明の進むべき方向に重要な示唆が発信されることを期待している。

育てて伝える

〝屋根を打つ雨音さえも忘れ去る心に響く子等の合唱〟

〝立ち姿歌う仕草に現れし歌に籠めたる生徒の思い〟

〝力強い権現舞いの勇ましさひたすら願うは町の復興〟

〝鳴り止まぬ拍手の裏で一筋の涙がつたう届かぬ思い〟

第一中学校の教職員の作品には教え子たちの心に芽生えてくる感性の豊かさへの期待と同時にそのぜい弱性への不安が微妙に混じり合っております。森を育て海を育む教育と活動に長年取り組んでいる畠山重篤氏の人間と自然との思いやりの交流のメッセージにも学校教育を行っている教員たちの短歌に込められたものと通じ合うものがあります。日常生活の中で我々がどのくらい自然エネルギーを無駄にしているかを、生態学的視点から教育している佐藤清忠氏の「ハカロー君」のメッセージは、まさに次世代を育てる活動につながっております。

さらに、気仙沼市が長年続けている「持続可能な発展のための教育／ESD」は白幡勝美氏がその長年の経験を話し、菅野剛氏は住田町で町ぐるみの森林保全政策を立ち上げ、それを実践してきた経験を語り、それは今後地域で生きてゆく今後の子どもらの教育に大きな示唆を与えるものと思います。

世界の絆

〝信じ合い全力合唱悔いはなし〟

〝一中祭みんなで創った心の輪〟

鵜浦真紗子さんは気仙沼滞在中に大震災に遭遇し、その後に在住している米国から震災への協力の手を差し伸べて来ました。その中で米国からの支援隊の合理的で実際的な協力活動に心を打たれ、地域や国を越えた絆の形成の大切さを強く感じたと言っております。この絆への思いは一中の子どもたちにも響きあうものがあります。

◆

今回の記事は大震災前に東海新報に「新聞で詠む気仙の心と姿・梅下村塾」として連載したコラムとつながっております。東日本大震災の惨状と人々の忍耐力の強さに、世界は新たに21世紀文明文化のあるべき姿を求めようとかじを切ってきております。その羅針を決める底力の一つが地域から宇宙地球とのつながりを創造することであると思います。

地域の自然、経済、政治、文化環境の疫学的分析と地域から詠んでつなげるという日常の地味な活動がその役割の一つを担うものと思われます。「森と水と命の惑星」国際会議がこの役割に貢献することが期待されます。

―◇―◆―◇―

「森と水と命の惑星国際会議～立ち上がれ三陸、世界に向かって～」が12日（土）に気仙沼市のホテル観洋、13日（日）に大船渡市のリアスホールでいずれも午後1時30分から開かれる。来場者も巻き込んでのパネルディスカッションなどを予定しており、多くの参加を呼びかけている。

両会場とも入場無料。問い合わせは東海新報社総務局（担当・臼井、TEL27・1000）へ。